

4. 刊行物、主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

4. 1. 刊行物

気象研究所研究報告 (Papers in Meteorology and Geophysics)

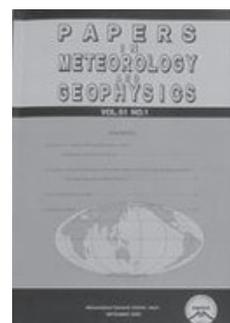
研究成果の学術的な公表を目的とした論文誌 (ISSN 0031-126X)。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論 (レビュー) を掲載している。主な配布先は、国の内外の研究機関・大学、気象官署などで、国立国会図書館でも閲覧することができる。

平成 17 年度からは、独立行政法人科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム”J-STAGE” に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers>

平成 29 年度は次の論文を掲載した。



第 67 巻

- ・藤枝鋼：日本国内における昼間の地表面付近の大気放射量推定法

気象研究所技術報告 (Technical Reports of the Meteorological Research Institute)

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物 (ISSN 0386-4049)。主な配布先は、国立国会図書館、国内の研究機関・大学、気象官署などで、気象研究所ホームページ (<http://www.mri-jma.go.jp/>) でも閲覧することができる。

平成 29 年度は第 81 号を発刊した。



第 81 号「集中豪雨・大雨発生の必要条件の抽出・妥当性の確認と十分条件の抽出」

(津口裕茂 (予報研究部)・大阪管区气象台・彦根地方气象台・京都地方气象台・神戸地方气象台・奈良地方气象台・和歌山地方气象台・広島地方气象台・岡山地方气象台・松江地方气象台・鳥取地方气象台・高松地方气象台・徳島地方气象台・松山地方气象台・高知地方气象台)

4. 2. 発表会・主催会議等

・ 気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年1回開催している。平成29年度は、平成29年12月2日（土）に一橋大学一橋講堂（東京都千代田区）で開催し、以下の研究成果について発表した。

【報告題目】

- ・ 気象研究所での自然災害の軽減に向けた研究の概要
報告者：隈 健一（気象研究所長）
- ・ 「平成29年7月九州北部豪雨」の発生要因について-線状降水帯の形成・維持メカニズム-
報告者：津口裕茂（予報研究部 主任研究官）
- ・ 日本における極端降水の将来変化
報告者：村田昭彦（環境・応用気象研究部 主任研究官）
- ・ 揺れの数値予報：次世代の緊急地震速報を目指して
報告者：干場充之（地震津波研究部 室長）
- ・ 気象庁海洋気象観測船「啓風丸」で観測された西之島の火山活動
報告者：高木朗充（火山研究部 室長）

・ 第15回環境研究シンポジウム「持続可能な生産と消費～資源循環型社会の構築をめざして」

「環境研究シンポジウム」は、気象研究所を含む13の環境研究に携わる国立試験研究機関、国立大学法人及び国立研究開発法人が参加する「環境研究機関連絡会」が主催する公開シンポジウムで、毎年、決まったテーマの下で、参加する研究機関が成果の発表を行っている。平成29年度は、平成29年11月22日（火）に一橋大学一橋講堂（東京都千代田区）において開催され、気象研究所は以下の講演及びポスター発表を行った。

【講演】

講演名：再生可能エネルギー分野への気象予測の利用
講演者：山田芳則（予報研究部 室長）

【ポスター発表】

- ① 電力・エネルギー分野での太陽光発電出力予測の検討
- ② ひまわり8号で観測した高頻度大気追跡風と海面水温の台風へのインパクト実験
- ③ 今世紀末の温暖化状況下におけるロシア主要7都市の気候はどうか？
- ④ 次世代の衛星搭載マイクロ波放射計降水推定アルゴリズム開発
- ⑤ 地球温暖化によって日本の雪は減るのか？
- ⑥ 気象研究所における大気エアロゾルの観測的および数値的研究
- ⑦ 固体素子二重偏波レーダーを利用した雨氷（うひょう）と凍雨の検知
- ⑧ 河川は海の塩分をどう変える？：気象研究所における河川起源水のシミュレーション